

総務文教委員会会議録

1. 開催年月日

平成30年4月9日 開会 9時56分 閉会 11時50分

2. 開催場所

委員会室

3. 出席委員名

西村 慎次郎 宮地 俊則 妹尾 文彦 山下 憲雄
西田 久志 三輪 順治 佐藤 豊

4. 欠席委員名

なし

5. その他の会議出席者

(1) 副議長 惣台 己吉
(2) 事務局職員 事務局長 川田 純士 事務局次長 藤原 靖和
主査 柳本 兼志

6. 傍聴者

なし

7. 発言の概要

委員長（西村慎次郎君） 皆さんおはようございます。

少し早いようですが、皆さんお集まりでありますので、始めさせていただきます。

ただいまから総務文教委員会を開会いたします。

〈議長あいさつ〉

委員長（西村慎次郎君） 4月1日の人事異動によって事務局の担当が代わられております。藤原次長です。よろしくお願いいたします。

事務局次長（藤原靖和君） 藤原でございます。よろしくお願いいたします。

〈所管事務調査について〉

委員長（西村慎次郎君） 前回までの委員会におきまして、教育環境の現状把握についてご協議をいただいたところです。本日は前回お願いしておりますように、テーマの絞り込みを行うこととしております。

まず、その前に調査事項の整理のため、前回の委員会で執行部から報告のありました回答を私のほうで取りまとめておりますので、その資料の説明をさせていただきます。

次第と一緒に心配しております上に、総務文教委員会所管事務調査事項2018年1月29日の追記、その下に3月14日の委員会の内容の追記という資料のほうをご覧ください。

今まで、この井原市の教育環境のあり方についてという所管事務調査の内容をまとめております。12月14日からスタートしておりますけども、その時点の質疑事項、また資料要求事項、2ページ裏に行っていたら、3月14日にも質疑事項ということで8点執行部のほうへ質問のほうをさせていただきます。前回の委員会までで執行部からいただいた情報、またこちらで整理した情報を基に現状把握ができたんじゃないかなというところで、今日テーマの絞り込みができたかと思っております。

3月14日の執行部から説明内容及び質疑応答の内容につきましては、その後ろにタイトルが12月14日の執行部からの説明内容ということになってますけど、そこが所管事務調査事項の1からずっと行って13まで番号を振っております、そこで今までの委員会の中での協議事項内容及び執行部からの回答内容をずっとほぼ時系列に並べております。一つひとつは説明しませんが、1からずっと行っていただいて最後12のその他というところまでまとめております。今後の検討の参考資料としてください。

ざっと、見出しレベルで言いますと、1つ目が、3ページにあります、市内幼・小・中学校の園児・児童・生徒数の状況について執行部から情報をいただいております。

それから、次の4ページへ移っていただいて、2つ目が市内小・中学校の学力・生活状況ということで、学力につきましては過去5年分の調査結果について情報をいただいたところです。

それから、5ページに移っていただいて、3つ目が市内小・中学校における学力向上、生活改善に向けた取り組みということで、執行部よりご説明、また資料のほうの提供を受けております。それが5、6、7ページに行つて。

次、8ページですけども、4つ目に生活状況・ICT活用・学習規律の徹底と学力との関連性がどうかということで執行部からの回答をいただいております。

それから、5つ目が、小・中学校における「いじめ」「不登校」の状況ということで、過去5年間の状況について情報をいただきました。

それから、11ページです。6番目、幼・小・中学校連携に関する本市の取り組みということで、今取り組んでおられる内容についてお聞きしました。

それから、12ページです。7番目、市内小・中学校の通学手段の状況ということで、徒歩、自転車、もしくはスクールバスということで、今の状況についてご説明をいただきました。

それから、13ページ目です。井原中学校校舎建設状況ということで、口頭での説明をいただいております。

それから、1枚めくって15ページです。9番目、市内幼・小・中学校の教職員の勤務状況ということで、いろいろと質問を交えながら執行部よりご説明をいただいております。それが、15ページ、16ページ、17ページ、18ページとなって協議をしております。

それから、19ページ目、井原市民の高校進学状況ということで、中学3年生の高校進学の状況について、過去5年間の市内外の比率、また人数について伺っております。

それから、次20ページが、大学等誘致に向けた本市の今までの取り組みについてということで、今までの経緯について執行部から回答をいただいております。

それから、21ページ目、その他ということで、総合教育会議の内容についてですとか、学区の区割りの設定の経緯についてですとか、野上幼・小の30年度の入学人数といったような内容について追加で質問をして、前回の委員会で回答をいただいております。

以上、今までに現状把握として調査した内容をまとめております。

私のほうからの説明は以上でございます。

ただいまの資料の説明に対しまして、何かご質問とかご意見がございましたらまずお願いいたします。

委員（三輪順治君） 19ページ、2カ所ペンディングがあるんですが、井原市民の高校進学状況で中学校卒業後の市外へのあれが出てますが、このペンディングの1番、次回の定例会でもいいんですけども、委員長のほうでもしお答えをいただいとれば、教えていただきたい。

それからあと、この下は多分佐藤委員だったかな。分野がいろいろあろうけど、そこらあたりのデータをということなんだけど、これは。

委員長（西村慎次郎君） 現時点でまだ質問を投げておりませんで、回答をいただけておりませんので、次回確認をして皆さんにお知らせできるようにしたいと思います。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君） それでは、資料の確認については終わります。

次に、テーマの絞り込みについて、ご協議をお願いいたします。

まず、どういう絞り方ということにはなろうかと思うんですが、今考えているのは数点にテーマは絞って行って、1、2点、もしくは多くても3つまでということに絞り込んでいきたいなというふうには思っておりますがいかがでしょうか。

〈異議なし〉

委員長（西村慎次郎君） それでは、数点ということで、皆さんのほうからこんなテーマがというところがありましたら、よろしくをお願いします。

委員（妹尾文彦君） 私が見読まさせていただいて、絞ったほうが、これがいいんじゃないかというのは2点ありまして、1つは井原市民の高校生の進学状況というのが、市外が多かったということがあるので、そこからUターンをさせるように何か研究といいますか、調査をするのを考えていったらいいんじゃないかというのが1点です。

それともう一つは、最近働き方改革もありますので、教員の方の労働時間が長いという問題もありますのでそのあたりと、部活動が負担になってるといえるのか、長い原因になってるんじゃないかというのはあるので、そこを部活動を市のクラブ活動と一緒にするとかということをしたり、外側からの講師を呼んで指導していただくとか、そういうことについて調査研究してみたらどうかと思います。

以上、2点です。

委員長（西村慎次郎君） まず、1つ目が高校進学、また大学以降のそこからUターンというところですが、総務文教になっていくんですか。

副委員長（宮地俊則君） 高校生の大学進学、それとも中学生の高校進学。市外へ行く人が多いということは、中学生の高校進学。高校の大学じゃないんですね。

委員（妹尾文彦君） 高校の大学ではなく、中学から高校へ行くときのUターンをさせるような教育について、指導の仕方というか、教科がそういうのがあるのか、そう持っていくように教育していくというような。

委員長（西村慎次郎君） 6次総とかに出てくる、7次総とかに出てくる、郷土愛の醸成とかという、その教育委員会、学校側からの取り組み、その辺をやっていってはどうかというようなところをテーマにした深掘りをしていきたいというのが1点。

それから、2点目は、教職員の負担軽減のために市内の、これは学校の先生以外でやるクラブへの参加を促す、その辺の協力を得て、指導者も外部から派遣してもらって先生の

負担軽減を図るような取り組みに対して、もう少し研究してはどうかということですか。

委員（妹尾文彦君）　　そういうことです。

委員（三輪順治君）　　黒板使えるんですか。それをちょっと今の書いてもらって、絞り込みするんだったら。使える。

副委員長（宮地俊則君）　　黒板じゃなくてホワイトボードです。

委員（三輪順治君）　　何でもええけ、書くものちよつと言うちゃったことを書きようろう。頭の中全部メモを正確に。ええですか、委員長。そりゃ、事務局にしてもらやあええんじゃが。

2、3点に絞り込もうということじゃけ、出してもらって。

副委員長（宮地俊則君）　　もうちょっと聞かせてもらいてえんじゃけど、今委員長が取りまとめていただいて、最初のほう、中学生の進学云々で、市外へこれを何とか食い止めるということはなかなか難しいかもしれんけど、将来のIターン、Uターンを、Iターンはないか。Uターン、Jターンを増やすために当然のことながら、今郷土愛の醸成とかという、ソフト面で言うちゃったけど、ハード面で、当然話が出てくると思うんじゃけど、例えば高校にいわゆる実務科、自動車であるとか、工業であるとかそういったことも含めるとなると、市の教育委員会から高校のあれになると外れてくると思うんで、そこまでは思ってもらえないんでしょうね。ちょっと確認なんですけど。

委員（妹尾文彦君）　　実はそこまでも思ってたんですけど、所管が違うということであれば抜いて考えてもいいのかなと思います。

副委員長（宮地俊則君）　　必ずそういう話が出てくる、私もこのテーマが大事だろうなというふうには思っておりますけど、それだと話がどんどん広がって、市ではどうにもならないような話が恐らく出てくるんじゃないかなと。どっか絞り込むんだったら、今確認だけさせていただきますかったんで。

委員（山下憲雄君）　　今の話は、私も共通しておるんですけども、11番のテーマで大学誘致に向けた本市の今までの取り組みで、諦めたというような状況で説明があったわけですけども、僕はこの話は学校を持ってくるということは人口減を食い止める一番大きな一つのことだと思ってます。前回も申し上げたんですけども、今の中学卒業して高校へほとんど出ていく。それから、大学へ行って帰って来ないといったような状況が続いてるわけですけども、我々が県立井原高等学校に云々とか、興譲館高校とかに云々とかといったようなことってというのはなかなか及ばないところだと思うんです、市としても。ですので、それをコントロールできるのは市立高校というのがあるわけですけども、あれは市のいわゆる経営政策の中で教育委員会なりの政策の中でコントロールできる余地があるんじゃないかと思しますので、なぜ市外に出ていくかという一つの理由を調査したりすることもデータを持ち合わ

せてないというような状況が教育委員会の説明の中にあるわけですから、そこも調査して、そしてそういう人がまた市外からもその学校に集まるような市立高校の運営のあり方っていうのには、僕は長期ビジョンというのが必要じゃないかと思ってます。ですので、今それを聞いたら、今のところ市民においてもあれは要るのかと、市立高校というものがどういう役割であるのかと、もう終わったんじゃないかとその役割というのが、夜間高校とか定時制高校とかという部分は非常にある種批判の声もあるのは事実だと思うんです。ですので、そこから辺まで、我々の総務文教委員会が手を出していいところなのかどうか、私はわからないんですけども、そういう調査をして、その行方というものについて指針を述べるということは必要じゃないかなと思います。皆さんの意見を聞きたいと思います。

以上です。

委員（三輪順治君） 井原の教育のあり方が読まれてると思うんですが、16ページ、17ページで市立高校のあり方について整理がございます。ただ、これは提言なんで、井原市がまだ第4次の教育方針ではないんですが、新しい要素も入ってるんですが、さっき山下委員がおっしゃったような視点、生涯学習を含めて、新築された市立高校の存立の基盤にかかわること、それから将来のこれの活用、大体少し提言書には盛り込まれてるような気がしますが、具体性に欠けてる。どこへ行っても通用するようなことを書いてるんで、今日大学の誘致等が現実的に難しいのが平成11年に結論がつけられてますし、子供が少なくなるという現状を見れば、恐らく経営家としてもなかなか投資しにくいじゃろうと。考えられるとすれば、サテライトとか分校的な要素は残るかもわからんけど、恐らく地元が相当負担せにゃいけん、と思うんです私。それで、今ある立派な校舎を活用していくのは大切な視点なので、市立高校ここに書かれてありますように、学び直しの学校としての役割が大きいと、しかもここには書いてなかったかわかりませんが、現在市外の方が半分ぐらいなんです。そうすると、若い子が来ると町も元気になることは間違いのない事実でありますから、市立高校に余り焦点を当てずに、今妹尾さんがおっしゃった進路の方向性、それはまあ当然Uターンもしてもらわなきゃいけん。高等学校のあり方、それから僕なんか議員研修のときに40歳になっても帰って来れるような企業群がないとやっぱりだめだと。井原だけでなくこの備後地域というか。だから、直接Iターンというんですか、ぱっと帰ってくるんじやのうて、Uターン、Jターン、これは視野に入れながら、今おっしゃったのは、僕はええ視点じゃと思います。だから、大学等誘致という案と、市立高校は今井原高校も興譲館も高等学校の県のほうで実施計画を作られますから、今年中に。だから、高等学校のあり方まで含めて一貫した教育のあり方で今は立場上は学び直して井原市が単独でやられたんだけど、実は考えてみるとあのハードをどうやって生かすかというのはソフトの部分です。これはここに書いてあることで大体間違いはないんですが、もうちょっと突っ込んでいけば、私は今のお話

は両者とも通ずるような話があると思いますので、もちろん高等学校という名前に限らず、生涯学習の場として多様な教育分野やニーズに応えられるものはこれから活用していけば、そここのとも栄えるし、もういいと思います。ですから、若い子も集まってくるし、何なら例えば、福山市立大学って福山市が経営しよんですが、分校、サテライト、放送大、僕の持論じゃけど放送大学とかいろんなものをお金を余りかけずに運営し、多様なニーズに応えるような教育のあり方。中小企業の方々が使ってもええっていうのは、物はないから難しいけど、今ITでかなり情報が伝わってきますので、そういうことにしてもらえれば、物理的にようけえ大きなものを、道具をこさえてというよりか、ITに関してのある意味新しい市立高校のあり方も考えられるんで、余りおっしゃったように役割というのを、今学び直し、昔は女工哀史の時代だったけども働きながら学ぶ、今は学び直し。これからはIT社会を睨んだ新しい実用的な何というか、時代にふさわしい人の育成というようなことで、これも変えていっても悪いことはねえような気がしますので、今山下委員がテーマを挙げていこうということに関してはさまざまなそういう側面もありますので、私は賛成いたしたいと思います。私の意見はそういうことです。

委員長（西村慎次郎君）　　その他にテーマとしてあげてはというのがありましたらお願いします。

委員（三輪順治君）　　その他のテーマは、私は今学び直し、働き方改革が国会でも議論になってまして、その影響は教職員分野にも多分及んでいきます。文科省は先に緊急提言として教職員の勤務のあり方、時間外のあり方についても各都道府県を通し、小学校長のほうに多分行っとうと思えますが、そういう意味ではこの9番の教職員の勤務状況が要因別にこの間口頭で言われましたが、やはり教師の本職としての役割を十分に果たしてもらうがために、何が問題でどうすればいいのか、そして子供が少なくなっていく中で教諭の方々が本当に子供に向き合う時間を確保していく、関連してこちらのここには書いてないか、統廃合は書いてないんですが、統廃合を避けては通れないと私は思います。

これは教育のあり方については、10年間かけて検討するって書いてあるんですよ、よう読めば。10年間かけて検討して何をするんやって検討することばあ10年しょうても意味がねえんで、やっぱり僕は小中一貫、高一貫を含めて前回もおっしゃったように、これから先の人口減を見詰め直しながら地域の教育力や、或いは地域の総合力を学校に求めているのは間違いないんですが、シンボリックな学校についてやるのは、腫れ物に触るような気がすんじゃないけど、やっぱり重要な視点としては、先ほどの働き方改革と言いながら教員が多忙を極めて、小っちゃい学校でもそりゃ個性がある、多様性がある、アットホームじゃって言いながら物凄い負担がかかっています。特に複式学級なんかは教員の負担は物凄いと思う。それは、なぜそうなのかというのをきちっと整理して、頭から小学校廃止せんのやというこ

とじゃなくて、多分そうじゃろ、今は統廃合について検討すると言いながら、片方は幼稚園は統廃合するって書いてある、この中に。矛盾しとんです。だから、そしたら同じような物理的な問題は別としても、考え方としてこうあるべきじゃねえかというのは、基本のテーマにしたらいいかと思うんで、僕は2つ上げるとすれば、今の9番教職員の勤務状況と、これを支えるためのベーシックな教育環境で、とりわけ地域を巻き込んだ話になると、学校再編についての考え方についてもうちよっというんな分野から突っ込んで話を聞くと。

その中にITの活用も出てくると思います。僕は井原放送がこの地にあって普及率が非常に高い。テレビが茶の間で見れる。しかも、CATVというチャンネルで。僕は議員になったときからの持論なんじゃけど、井原放送を有効に活用するために、行政がもっと金を投資する公的理由があるわけじゃから、例えばALTの方が単に学校だけで教えるんじやのうて、CATVの中に入って行って番組を作っていく。じゃけ、ソフトが教材を井原放送通して提供する。それは理科にしても社会にしても歴史にしてもそう。そういう人材が一遍に割かれん場合は放送という手段を通して、子供たちに文化や歴史を伝えていくということで、要はそういうふうな形で大きく2点に絞って、書いてくださればいいんだけど、1つは教職員の勤務状況、本来の教職員活動のために、何でもいいんだけど、9番に関連するものと、それから、生徒数の減少に関連して、1番に関連して非常に厳しい状況がもう目に見えとるんで学校のあり方。それから、幼・保、幼稚園、保育所、小学校、中学校、小中一貫のことを含めて、私は1番と9番を、さっき言われたものも附屬的に関連すれば、書いていくというふうにして、絞ってやったらいいかなというのが私の意見です。

以上です。

委員長（西村慎次郎君） 1つが、教職員の勤務状況、負担軽減に向けた何か整備ということ。もう一つが、生徒数、児童・生徒、園児含めて減少していく中で学校、地域のあり方。

委員（佐藤 豊君） 私、8ページの生活状況ICT活用学習意識率の徹底と学力との関連性というところの中で、ICTということで、ハードの面というのは各学校に整備が進んだと思うんです。あとはそこの行でいえば、上から9行目ICT活用が日常の授業に取り入れられ、教師のICT活用指導能力の向上によってさらに学力向上の度合いを高めることになると考えられますというふうにあるんで、我々の時代とは大きく違って、今はもうICT、またそういったパソコンが基本になった時代になつとるんで、そういうことにもう少し力を井原市として注いで、先生のスキルアップも含めて、その指導力も含めて、そのことによって子供が今以上にICTに興味を持ったり、それで勉強していこうという動機づけを作ったりそういった方向性をもう少し我々も勉強して、そのために何が必要なのかといった項目を、余り範囲を広めてもなかなか議員としてもできんと思うんで、もう少しまとめたところ

ろの所管事務の一つの項目にしたほうがいいんじゃないかというふうに思います。

委員（西田久志君） 今、佐藤委員が言われたところ、僕は賛成なんですけど、4番、それから3番が関連づいとするかなということで、平成26年総務文教委員会で各小学校、中学校を回って、これは学校の調査というか、校長先生あたりに聞いたことがあるんですけど、市内の状況というものが、僕はこの机上じゃなくて、現場へ行って現場でまた無作為に抽出して、要するに何校か、これができるんかどうかちょっと疑問なんですけれど、授業風景なんかを視察させてもらって、子供たち、子供たちが無理なら先生、校長先生、教頭先生でもいいですけど、どなたか聞ける人に聞いて、今の現状はこうだということを聞いていただいて、これから先もっとも必要なのは何かということの研究するのもいいんじゃないか。

それから、学習技術の徹底。そこら辺も現場で聞いて、それをこれから机上のほうで検討するっていうものいいんじゃないかと。だから、井原市の市の現状を把握するのが一番まず大事なんじゃないかなということで、実際にこの委員会で見に行かせていただきたいと思うわけです。そして、またそういうことを検討していくと。どうでしょうか。2点です。3番、4番。

委員（三輪順治君） 今に関連して。

委員長（西村慎次郎君） 追加で、学校訪問の追加。実情把握。

委員（三輪順治君） 難しい議論しちゃいけません、教育と政治の関係で、学校現場に私たちが行くことの意味を考えると、我々はどっちかというたら国とは違いますから、要は教育に政治を持ち込まないという、端的に言えば。そのときに色が、色っちゃおかしいけど、要は中立性、公平性をどう保っていくか。見ることはいささかやぶさかではないんですが、受けとめる方が非常に神経質になって、議会のほうからの総務何とかというのが来るぞと言うてから、私はちょっとこれは先進地のことも含めて、調査してから取り組むべきじゃないかと思いますが。議長がおっしゃる意味はようわかるけど、現場を知ろうと、現場を知る方法はさっきもおっしゃったように、小・中学校の先生に聞くのも、間接的に保護者に聞くのもええけど、現場に我々が例えば乗り込んで行って、後ろへ行って、聞くというのはちょっと私は直感的には足を踏み込み過ぎじゃないかというような、直感で。そりゃええんだというんならそりゃええけど、一番ええことなんじゃけど。受け取るほうからしたら、嫌だなという気がする。

委員（西田久志君） 26年当時、私も総務文教委員でした。その中で野上小学校、16人児童数の中で校長先生がおられて、校長先生に受け答えをしていただいた。校長室じゃったか。本当に掛け口ぐらいにどんどんどんん言うていただいたんですよ。それで、16人が少数かというたら、そうじゃないんだと。井原中学校に行っても、そういう中1のギャッ

プがないとか、結局大集団の中に入っても全然臆することなくやっていると。それから、保護者の方も地域の人も職員の方も本当に輪の一つになって、教育についていろいろ研究されているというようなことで、どんどんどんどん情報が入ってきたんですよ。それは、芳井中学校でもそうだったと、木之子でもそうだった、木之子小学校だったかな。そういういろいろな物凄い体験としてよかった印象があるんです。

委員（三輪順治君） 先生方とのお話。

委員（西田久志君） よかったと。だからもうちょっと踏み込んでできるのかなというところがあります。だけど、三輪委員が言ようにてんようにその懸念はあるとは思いますが、ただただそういう印象が強いものですから、僕も行ってもいいのではないかなというんですが、他所へは視察しますが、いざ我が市のことについて知らなければまず何もできないのではないかなというふうに思います。

委員（山下憲雄君） 議員という立場という今話がありましたけども、この立場をよく理解しないまま発言をしますけども、政治と教育の分離という話も今ございますけども、その辺も理解しないまま話をしますが、例えば市民の声を聴く会でいわゆるこの教育、小学校の例えばあり方とか、今この小学校はこんだけの人数になってますけど、地元の皆さんはどういうふうに思っておられますかといったようなこととかを聞くというようなことをしたら、いや、もう統合すべきだと思うように、もうこのままじゃ3年、5年先にはこんなになるのは見えとるやないかみたいな声っていうのは、出てくると思うんです。そういうことを聞くというのは、例えば地域と地域の児童減少における問題みたいなことを聞くっていうのは、僕は大事なことやとは思いますが、それを聞いてはいけないという縛りがあるとすれば、非常にセンシティブな問題だから、これは用心しながらいかんといけないという話を教育委員会でもそういう話を、私の質問の中でも地元を優先しますとかといったようなことで、こっちからは触りませんよと、地元から声が上がればタッチしてこっちも手を差し伸べていきますみたいに、教育という分野において少しセーフガードというか、ちょうどそこは聖域というか、入り込めないようなところが僕はあるような気がしてるんです。教育委員会の領域は我々とは別だと、そこら辺について皆さんで考えられる部分が整理ができれば突っ込みがしやすいと僕は思ってるんですよ。ちょっと言ってることが難しいんですけども、今の話、学校に行って議員としてそういう訪問調査をすると、これは非常に難しい問題。地域の中ではそれはオーケーだよという、これはまたできるかどうか。それも教育の問題について教育委員会がやってるんだから我々がそういうこと触ることじゃないよという立場に置かれてるのか、その辺むしろ皆さんの考えはいかがなんでしょうか。

委員（佐藤 豊君） 我々は、総務文教委員会という議会の中の委員会でありますので、まず現実、現場というものを知らずに机の上だけでの議論をしてもなかなか本筋まで届かん

のんじゃないかというふうに思うんです。そういった意味でいうと、学校側の了解が得れるんならば、先ほど西田委員のほうからありましたけれども、お話を聞いて、今の現状、課題、これからこうして欲しいという要望等も訪問すれば出てくると思うんです。そういったことから、現場を知って、それをまた議論しながら政策に結びつけていくのが議会だというふうに私は認識しておりますので、決して学校側にプレッシャーをかけるという一面ばかりにはないというふうに思うので、今後はそういった方向性で我々も現場主義という形の姿勢で取り組むべきじゃないかというふうに思うんですが。

委員（山下憲雄君）　　そうしますと、その市民の声を聴く会とか、また我々総務文教委員会という一つの組織の中から地元の教育環境というんですか、地元の教育に対する皆さんの地元の声というのでも聞く機会というのを、学校に訪問すると同時にどっかの代表地区の地元でそういう問題を聞きに行くことも加えていただけたら、幾重にしたらいいかなと思います。学校も行くし、地元にも聞きに行く。

委員（三輪順治君）　　折衷案みたいなんだけど、教育委員会の教育方針は縦系列で国から県、県から市と来てます。井原市の教育委員会はそれを踏まえて各学校へ通知します。問題はその流れは一気通過なんですけど、そこから先の各学校の校長の裁量が見えないんです。だから、始業式をいつから初めてもいい。とにかく学校の休みかわかりませんが、どこまでが統一ルールでどこまでが裁量かいうのがわからんので、一概に言えませんが、多分学校訪問したら、直感ですよ、授業風景はまず僕は無理やと思います、現実問題。小学校の教員室や校長室で話をするのはええかもわかりません。しかし、そこには教育委員会の一貫した教育方針があるわけですから、それ以上のものが出ては来ないという気がする。小学校の校長に聞いても、そりゃあ教育委員会に聞いてくれとか、例えばですよ。それが出るようじゃったら、教育規律ができてねえと思う。僕は教育に規律を持ち込むべきじゃねえと思うけど、やっぱり国の教育方針を受けて、地方の教育委員会があり、そして指導要領もあって、それを体現しよんじゃけえ、その流れというのは絶対一貫しとるわけ。ところが、応用部分においてはいろいろある。多分出てきょうるのは、それを支えるいろんなものが足らんから声が出よう。その声を吸い上げるのはええと思う。でも、教育方針、内容についてそのものをやることは僕はできないと思う。言ようる意味はわかりますね。だから、行くことはやぶさかではないけども、行くことに関して教育委員会とようすり合わせをしながら、校長の裁量なり、学校の裁量はどこまでか見えないから、そこんところは気をつけながら行かん。と教育方針が出てきますから、これからえっと外れたような議論はできないけども、一般市民感覚、議会感覚でいうたら、統廃合せんというて書いて、せんと書いてあるに等しいけど、それはおかしいんじゃないのというて。それは一石を投じよう。僕はそのために学校教育行って、現場が苦勞されとる、複式は難しいんじやのうとか、或いはこれは足らん、男

手が足らんとか、小っちゃい学校あるでしょ、やっぱり。そういうのを聞いて帰って、それを環境として反映さすような、これはええと思います。いたしいけど、今のテーマは正しいと思いますけど、その仕切りを私の理解はそういうふうに思うとるんで、そこまで先に突っ込んでいくのはやっぱり避けるべきだろうと私は思います。

委員（西田久志君） 26年当時、総務文教委員の方ってどれだけおってんですかね。1人。というのは、私たちは委員長もそうですけど、と思うんですけど、やはり現場へ行くと何点か質問を考えて、多分4点か、考えたんですけど、それがぶあつて広がって校長先生の思いを私たち委員会に言うていただくんです。そういうところで、本当に行ってよかったなという気持ちが今あるもんですから、皆さんに提案したのはやはり現場へ行ってそこで校長先生でしたけれど、基本的なことは全然揺るぎはない、三輪委員が言われるようなところは揺るぎはないんじゃないけど、その思いたるや、野上小学校の16人ばあ言うちゃあいけんのんですけど、そういうところとマンモスの出部小学校に行きました、それぞれの問題点があって、そこを現場で聞くというのは大変重要なことだと思ったから提案したわけでございます。

委員（佐藤 豊君） 私も監査で10校近く、各学校を訪問させていただいて、校長先生等々からいろんな学校方針、それから今の状況、それから不登校の現状とかいろんなことの説明を受けて、それで学校サイドとしては予算要綱としてはこうことをやっておりますと、こういったことを希望してますというような、監査としての聞き方をしたんですけど、学校は学校なりにここの小学校の教育方針はこれが3本柱を基本にやっておりますと、今の現状はこうですという形できちっと校長先生はそういうスタンスを持っておられますんで、それ以上のことを我々がどうしなさいこうしなさいということじゃなくて、現状を聞かせていただいてそういう現場のことをまず我々は知ってから、どうしたことがここの学校教育に応援になる取り組みにつなげることになるかといったことを本当に考えていく側だというふうに思った姿勢で取り組むことが必要じゃないかなと。

副委員長（宮地俊則君） 先ほど委員が心配されてることは、議員として議会として教育行政にどこまで立ち入ることができるのかということを経前から随分心配されておられるようなんです。これは、結論から言いますと、教育行政に議会としてかかわっていけないものというのは、全くないと思います。聖域は私はないと思います。ただ、一方委員会として、所管事務調査と言っていますが、調査権というものが議会にはありませんし、議員にもありません。ですから、いろんなことを調査研究して、それで導き出した結論を学校に対してこれをしなさいってことはもちろんできません。さっき言われたように、統廃合のことにしても、議員個人としてうちの地域でこの学校を統廃合しようという声が出てるといって議員個人で動かれるのは、何ぼ動かれても私は議員の職務として大いに結構だと思います。

ただ委員会としてその結論を導き出すときにはかなり慎重に全員の総意を持たなきゃいけないというふうに思いますし、これは各学校じゃなくて教育委員会に対して言うことは私はこれはオーケーだと思います。先ほどの、ごめんなさい、皆さんが言われてる現場の視察、これは過去に何度もやっています。一向に構わないと、ただいきなり押しかけるとかじゃなくて、やはりそこは手順として教育委員会に、ある意味学校へ行かせていただく、お話を聞かせていただく、教育現場を見させていただくというのは、これはお願いだと思います。議会の委員会として。ですから、それは教育委員会を通してきちんと手順を踏んですれば、何ら問題ないことだと思います。これまでも何度も総務文教委員会、議会の後、車でずっと各学校を回っていろいろお話を聞いたことは何度もあります。

委員（三輪順治君） 今、副委員長がおっしゃったことでいいと思います。問題なのは、現場の意味なんですが、現場はあくまでも教育委員会が所管する市の事務に関する教育行政の範囲であって、授業風景は各論の校長配下にある授業のやり方です。これは少し市の事務ではないような気がする。これは恐らく文科省なり教育方針なりでやってると。だから、おっしゃったように整理する意味で私は授業の風景はちょっと遠慮すべきだろうと思うし、学校へ行ってヒアリングするのは私は市の事務に関する調査の一貫で行くのは私は大いに結構だと思います。ですから、やろうとしたらその範囲で項目についてもあらかじめできれば教育委員会と詰めて、こういうことを聞きたいと、聞きたいことを先に流してもろうといってから、現場へ行く。それこそ学校の統一方針というたら学校の個性が出ますよね。そういうやり方なら大いに結構です。その上に学校はどうあるべきかという議論を重ねていけば現状に即した提案ができるんじゃないかというふうに思います。

副委員長（宮地俊則君） おっしゃるとおりだと思います。今言う、教室で授業風景を見るというのも、先方に迷惑をかけてはもちろんいけないと思います。ただ、今言うように市でしてるICT機器、或いは電子黒板、そういったものの使用状況の現場を一度是非見せていただきたいんだということで、教育委員会を通して現場の先生方、校長先生を通して、言い方は悪いですけど、ピンポイントでこういう状況を実際に見させていただきたいんだということで、丁寧にお願ひすれば、決して不可能なことではないと思いますし、失礼に当たることでもないと思うんです。もちろんそれを受けていただく、受けていただかないは向こうの裁量だと思いますけども。そういったことで、その学校の指導に対して云々ということではありませんので、それはお願いしてみても何らおかしい問題ではないと思います。

委員長（西村慎次郎君） 今、学校訪問というご意見がありました、その他テーマとしてありますでしょうか。

委員（山下憲雄君） 今、学校訪問がそういうことですので、よくわかりました。

地域の教育環境っていうのは昔から環境整備というのは時代時代によって対応して、いろ

んな問題点は持ってきたと思うんですね。ICTなんかというのは、今現代に即したこの情報化社会の中でニーズが非常に高くなってきた。並びに人口がどんどん減って児童数が減って、小学校が減り中学校が減りというような将来の見通しの中で、井原市の教育がどうあるべきかといったようなものをまた新たな外部環境として、その中で整備していかないといけないっていうものが、学校側にも突きつけられてるはずなんですけども、そういった意味からしますと、学校と地域は一体であるというような考えがあるわけですから、地域の活性は学校にもあると。学校のない地域に活性はないと。これはそういう関係にあると思いますので、地域の皆さんが学校訪問すると同時にどこか代表を決めて2、3カ所を回るということが可能かどうか、僕は回るべきだと思うんです。どこかの地域の例えば自治会の皆さんなり、保護者の皆さんに何人か寄っていただいて、ヒアリングをするといったようなことが望まれるかどうかを検討いただけたらと思います。

委員長（西村慎次郎君） 学校訪問と併せて、地域の方々、自治会の方また保護者含めてというところで、その地域の方とのどう考えられてるかとかということ話し合う場というのもあってもいいんじゃないかというようなご意見でありました。

委員（三輪順治君） まさに今おっしゃったのは、文科省が平成27年に通知した内容なんです。地域とのあり方、地域人材とのあり方。

委員（山下憲雄君） 今やってない。

委員（三輪順治君） やってない。具体に見えないんですけども、それは大切な視点で、これから教育の方向が今変わってきょうりますが、その一つの方向性の中にそれが入っていましたから、この教育委員会の答申の前文に書いてあります。時間とっちゃいけんけど、前文の1ページだけ開けてばらっと見てもらやあ、1ページの総論のところ「はじめに」があるでしょ。それなんですよ。それをおっしゃったと思う。だから、僕はこれは大きな視点じゃと思いますから、当然学校行く場合は地域の代表の方々とも話をしてもらやあ、ええと思えますよ。

委員（山下憲雄君） そこまで言うてしまうとあれなんで、私はこれを一般質問の中でもしたんですが、非常に深い問題だけにそれ以上の再質問とかは差し控えておるんですけども、教育委員会は地元の声が上がれば対応しますという考え方でありました。なおかつ、1人でも2人でも児童がおる間は教育が必要でありますという考え方であります。そこまでなるまで置いとけば、地元の声も上がらない。上がったときにはもう既に遅しという関係は、僕は子供にそのリスクを押しつけてることになるんじゃないかという考え方を持っていますので、実際の地元の人たちもどうしたらいいかわからないという人ちが大半だと思うんです。ですので、私たちがこういう声をちょっと投げかけてみると、わっと湧く可能性は僕はあって、一番ベストの状況を導き出す可能性はあるんじゃないかと考えてます。ですので、非常

に問題を爆発させる可能性はありますけれども、どこかでこの点に誰かが着手しないと、今私が思うところによるとどちらも手つかずのまま、5年過ぎて非常に厳しい状況の中でやれやれと言いながら来たときには少し、その5年間の今年入った卒業生がもう中学に上がるまで放っとくのかという問題ですね、この問題は、ということを考えています。

委員長（西村慎次郎君） 地域とそういう話し合いをする場を設けるとしても、それだけがテーマではないというところでもよろしいですね。そこの話は出てくるんだとは思いますが、すけども。

委員（山下憲雄君） それだけがテーマじゃないんですけども、教育環境について皆さんはどういうふうに思ってるかというのは、地元の声というのをキャッチしとかなないと、説得力には欠けると思います。

委員長（西村慎次郎君） 委員会としてそこまでやっていくのかということも、ちょっと考えるところもあるんですが。多分この前文は学校と地域というところじゃないですか。そこへ議会がどう入り込むかというのは、実情にここにはうたわれてないです。

委員（佐藤 豊君） 今、山下委員が言われたことは、本当にすごく大切な視点だというふうに思うんですが、先ほど宮地副委員長も言われたように、個人の議員としてまず動いてみて声を聞いてというところからスタートしないと、委員会が動くということになると、議員が7、8名が動くとなると非常に地元にとってもインパクトが強過ぎるというのが今の現状だというふうに思うんです。ですから、もう少しそうした視点を持たれて、議員1人ないし、もう一人の議員を誘われ、近隣の学区内の議員を誘われて2、3人でそういった実情を聞いて、ああ、こういった声があるんだというようなことを集約されてという段取りを踏まれた中で、それをまた委員会のほうに乗せていただいて、みんなでこういった地域地域の現状があるんじゃないというようなことで物事を進めたほうが順番としてはいいんじゃないかというふうに、私自身としては思います。

副委員長（宮地俊則君） 話が特化してしまって、今言う統廃合の話になってるようなんですけども、大変デリケートでして、芳井の小学校が休校なり廃校になって統合されました。これに関してもやはり先ほどベストな選択とか、手遅れとかと言われるんですけど、視点が両方あると思うんです。例えば子供たちの保護者に見れば、生徒数が減る、我が子を大勢の中で切磋琢磨して育てたいと、ですから統合して欲しいという保護者の思いの方も大勢いらっしゃる。逆に、地域とすればこの小学校がなくなったら地域の火が消えてしまう、或いは町民運動会とかいろんな地域の活動拠点になってると。ですから、たとえ1人、2人になっても残して欲しいという、極論ですけども。そういう地域の年配中心の方の思いもあるわけですし、ですから100人が100人同じ考えには決してならないと思うんです。ですから、ベストというところが非常に難しいので、結局はよりベターということになって

くるかと思うんですけども、そういうことでちょっとなかなか議会として、或いは委員会として先導して旗を振るといのは非常にリスクが大きいというか、問題が大きいと。

委員（山下憲雄君） よく理解しております、非常に地元でもそういうことは理解して、いろんな声が上がるのは当然なんですけれども、ただ教育委員会も話されておりますように、例えば児童数が少なくなっていくこともたくさんありますということもわかっています。例えば、ゲームであるとか、運動会であるとか、団体競技であるとか、全てのことが野球は9人いなきゃできないわけだし、5人いなくなったら絶対的にこれは不可能なことであります。そういうようなことで、その授業についてはどこかの学校と連携しながらやっていくといったようなこと、このプログラムの姿勢が1年でも2年でもできるだけ近い間に実現するような方向性をしていかないと、今はやっているけども、具体的には見えてない。市民にも見えてないと思うんです。そういうことを着実にやっていく、例えば水泳の時間もリレーしようと思ったら夏は3校ぐらいが寄って同じところへ行って、水泳大会をやるとか水泳の対抗をやるとかといったようなことっていうのはプログラムの中で具体的に示されれば活性していくと思うんです。そういうことが今見えない。我々も見えないし、真にそういうことが具体的にプログラムされているかといったら、僕は見えてない。それはやっぱりある意味ブラインドになってるわけですから、そこのところはどんどん活性化も含めて親の不満、不平が例えばあったり、子供の問題があったりしますと、聞いて、だからこうしたらどうですかみたいところは導き出せるんじゃないかなと、何も統廃合が全てじゃないと思うんです。それも、着眼してると思うんですけども、遅いんじゃないかなと思ってます。5年先とかといったんじや。理科の実験とかどっかの社会見学とかというにしてもわかりだと思っんです。まとまって、できるだけ例えば稲倉が今年地元に戻ってくる人がおって、11人入学してほっしてるとは思っんですけども、そういう人たちがどこか5人よりも10人、10人が20人と接するほうが子供の教育環境としては、やっぱり切磋琢磨という意味においてもいいと思っんです。だから、これもう副委員長がおっしゃるようにマジョリティーという点から考えたら、やっぱりたくさんの人と交わって高校に上がり、社会に出ていくほうが僕はベストだと思っんです。そういったことを含めて心配してると、そういうことを常々私は申し上げるわけですけども、そういう特化、統廃合の特化という意味じゃないということを理解していただきたいと思っます。

委員長（西村慎次郎君） 学校間の交流というのはされています。渋川研修旅行であれば、稲倉地区と県主地区行ったりとか、修学旅行も一緒に行ったりとかということもされています。イベント、イベントでの交流というか、まとまった行動というのはされています。

委員（山下憲雄君） 授業は。

委員長（西村慎次郎君） 授業自体は聞かないですけど。

委員（山下憲雄君） 授業も僕はもしそういうことができればと。

副委員長（宮地俊則君） 中学の部活なんかもしてるんじゃない。

委員長（西村慎次郎君） 部活動は。

副委員長（宮地俊則君） してると思う。例えば、ソフト部なんかメンバーが足りんから、サッカーとか。

委員（三輪順治君） 今回の関連、統廃合だけに固執しないんですが、学校は確かに地域のシンボルであり、拠点であり、文化の象徴でもあり、或いは集う場でもあります。しかし、これが世の中の動きでやっぱり子供が少ないと非常に運営は難しいし、教えるほうも複式学級を一遍見学させてもらいましたけど、ぼっけえ難しいですね。僕もギターを教えたりするけど、弾ける子と不得意な子と全然指導が違います。それと同じことが教室で起こってるわけです。こっち4年生がおって、こっち5年生おってとか。そういうのは置いてえても、いずれ寂しい状況になるんだったら、今山下さんがおっしゃる、もうちょっと一歩行けんところまで踏み込んで議論して、この学校をじゃあ将来どがんに使うていくんかということまでも議論しとかにやいけんのんで、今全国の例がある統廃合の活動機能の復活といいますか、こうやって地域が元気になつとる、この学校をもとにいっぱいいい例があると思います。文科省のホームページを開いたら。そういうふうにはこれは教育委員会だけの問題じゃなくて、実は今の未来創造部なり、或いは建設部なり、或いは子育て皆が関係せんとできない問題。地域の拠点である、シンボルである学校がいずれということになってしまわんうちに、夢を地域で語ってもらい、自らの地域の存立を共に考えるような投げかけをしていくんじゃないら、どうしても避けて通れないと私思うんで、今の1番の小・中学校の子供の数が減ることを起点にして、へえならこの地域がどがんするんやということの各論の中に盛り込んでいきやええと思うんで、どこまで書き切れるかわからんけど、私はそういう全国の例はいっぱいあるし、それから親の、それから地域の考え方も変わってきょうりますんで、うまく時代に合うたような形で、学校という大きなインフラを地域で最大限に使っていく、そういう発想も私はこれからは必要やと思いますんで、是非取り組んで欲しいと思っております。

委員長（西村慎次郎君） テーマのほうを8点ぐらい皆さんに出していただきましたが、その他よろしいですか。この中から絞り込みということでいかがでしょうか。テーマも重たいものというか、大きいものもあるなと思うんで、3点というと大きいなと思うんで、2点ぐらいで絞れば、1点集中でもよろしいですが、1、2点ということでいかがかなと思っております。

あと、調査期間というのもありますので、そのあたりも踏まえながら皆さんの先ほどの意見交換の中にも踏まえながら、1点もしくは2点に絞れたらなというふうに思ってます。

委員（西田久志君） 調査の目的の中に本市の教育環境のさらなる充実の目的、学校教育

云々とありますけれど、1番から11番までということで調査研究で発表があったわけですから、執行部のほうからあった、その中で昨年春日井市のほうへ訪問させていただいて、いろいろICTと学校規律の徹底についてを他市の事例を調査研究したわけですが、その中でやはり本市のそういった同じようなことについて、だから3番と4番を重点的にやったらいいと思います。2点したらいいと思います。2点というか、3番、4番をしたらいいと思います。

委員長（西村慎次郎君） このテーマでいくと、ICTの有効活用のための取り組みと、あと現場を知るという意味での学校の実情把握ということで、ここにICTだけ書いてあります。それ以外も含めて実際に調査を現場へ行く場合はどういったことを調査したいというのを改めて皆さんからご意見いただきながら進めるようにはなるとは思いますけども、そういった現場を見ることと、あとICTの有効活用に向けた調査ということで。

委員（妹尾文彦君） 私も今委員長おっしゃいましたように、まず学校の実情把握、ICTだけじゃなくて、他のことも含めてですけど、その内容はこれから詰めるとして、これをしていったらいいんじゃないかと思います。

委員（山下憲雄君） いいと思います。

委員（佐藤 豊君） 私、この間も最後のほうに調べていただいた19ページの子供さんの進学状況で、本市にそういった子供さんを地元中心に進学してもらおうと思えば、どういった方向性の科があれば地元には何人かは残ってもらえる。やっぱりそういったことと、もう今後議論してもいいんじゃないかなという思いもあったんですけど、ちょっとその辺も、先ほど来から言われてるように、時間もかかりそうなので、先ほど議長のほうからも3番、4番というようなお話もあって、僕も3番、4番という方向が今のところは一番ベターじゃないかなと思いますので。

委員長（西村慎次郎君） 先ほどの19ページの件は、執行部へ確認するところまではしていきますんで、そこはご了解ください。

委員（妹尾文彦君） 私も、佐藤委員さんが言われる、外へ高校進学で出て行くというのは聞きたいこともあるんですけど、それは学校の実情把握の中のテーマとしてもまた入れたらどうかという話をしたらいいんじゃないかと思いますので、3番、4番でいいんじゃないかと思います。

委員（三輪順治君） 私は3番、4番は同一項目らへんで思うておまして、実は調査項目の6番ですけど、幼・小・中学校連携に関する本市の取り組み。これは非常に地域を巻き込んで大きな話になるんですけども、やはり委員会として地域の、或いは子供たちの将来全体を考える場合には、6番は、僕はやはりこれから物理的に離れてるだけにシステムティックな問題を含め、ICTの活用も含めて関連すると思われるし、地域を巻き込むので、僕と

すれば6番は是非入れていただければなあというふうに思っています。

委員長（西村慎次郎君） 多分そのあたりも現場への実情把握の中でも出てくる質問事項の一つかなとは思ってはいるんですが、いよいよ提案する中でもそういった連携というのはキーワードになってくるんだろうなというのは個人的には思っていますが、そういった中で含めて検討というのはいいかなというふうに思っています。

委員（山下憲雄君） その連携の中で、小・中、中・中は連携をいろいろやってるけども、小・小はないんですよ。その辺もその他の質問の中で取り入れたらええと思います。

委員長（西村慎次郎君） それでは意見が集約してきたんじゃないかなというところで、こちらへ書いてるICTの有効活用のための取り組みという1つのテーマと、もう一つは学校、これはお願いになるんで実際にどうなるかわかりませんが、今まで実績がありますんで多分幾つかの学校は受け入れていただけるんだと思うんで、学校の実情把握ということで、またそれにつきましてのどういった内容を現場の校長先生もしくは教頭先生と話ができるっていうか、そういった実際の授業まで見れるかどうかというのもありますけど、そういったところを今後詰めていきながら現場も見てというところで、この大きく2点のテーマで進めていくということによろしいでしょうか。

〈異議なし〉

委員長（西村慎次郎君） それでは、次に次回の委員会における、この所管事務調査の協議事項についてご協議をお願いしたいと思います。

先ほどの学校訪問の件については、どういった内容で学校を訪問し、現場のご意見を伺うかといった、実際の中身についてのご協議になろうかと思っております。

委員（妹尾文彦君） それでいいと思います。

委員長（西村慎次郎君） 実際にいつ頃訪問というのは皆さん、まだ新学期がスタートしたばかりで多分学校もばたばたしてるんで、もう少し時間を置いての調整かなとは思っておりますが、行政視察を7月の上旬を思っまして、それまでに現場が見れとくと、そこも踏まえて視察ができるのかなというのがありますし、そこまでに本当に受け入れてもらえるかというところもあるんですが、それを加味しながら調整はしていきたいと思っは思っております。

委員（佐藤 豊君） 運動会が5月頃あるんで、それ以後かなと思います。

その辺はちょっと委員長にお任せしてもいいですか。

それをできるんなら、それを受けていただいて井原市の現場を見て、それからまた視察先でまたあわせてのどこら辺を改善するべきかというようなことでのすり合わせをしての議論

を今後続けていくという流れを作ればいいんじゃないかなというように思います。

副委員長（宮地俊則君） 中身は置いときまして、日程的なもので言いますと、先ほど委員長が言ったように、7月前半に行政視察ということですので、以前よく建設もそうでしょうけど、6月定例の委員会の後、車でずっと、建設であれば主要なところを回らしてもらった。総務文教においても学校を回る時に、委員会の後、何校か3校ないしは4校かを午後回らしていただいております、市のバスで。そういうことができれば、6月21日が総務文教委員会の日ですんで、それが終わった午後からというのはどんなでしょうかね、時期的に。

委員長（西村慎次郎君） 訪問する学校数にもよってきて、1日で行けるかどうか、複数校というところはあるんですけど。まず、1つの候補はそのあたりをターゲットにという。

副委員長（宮地俊則君） 小学校2校、中学校1校あたりぐらいで従来回らせていただいていたように思います。

委員長（西村慎次郎君） 26年度は、もう少し回ったかな、中学校2校でした、芳井と高中に行って、小学校が大規模校と小規模校、中規模校というて野上、木之子、出部に行っただんです。5校に行くと複数日かかるかなとは思ってはいるんですが、6月あたりの委員会開催日の午後とか、もう一日ぐらい皆さん都合を付けていただいて、受け入れていただける規模を変えた学校というところで調整をさせていただくということで、日程的にはよろしいですか。

委員（三輪順治君） まだ開かれてもない6月委員会の付託案件もわからない中で、通常は午前中に大体終わるんですが、先方との約束を含めて考えてみると、本会議中の視察というのは僕は余り好ましくないと思ってるんで、本会議が終わってできるだけ早いうちに6月の終わりから7月の中旬にかけて行くのが私はいいかと思います。先がわからんところを予定立ててもいけんと思います。

委員長（西村慎次郎君） そう言われると、その保障はないと。

委員（佐藤 豊君） 総務文教委員会は委員会の最後の委員会になると思うんで、それで前回もそういった取り組みで日程を組まれとんなら、前回そういった例もあるんで、僕はそれで実施してもいいんじゃないかというふうに思います。その日を次のまた日程を作るとなってくるとなかなか日にち的にもどうかなと思うんで、そういう日にしてしまうと言ったら語弊もあるかもわかりませんが、その日で前回もそういった例があるんならその日でいいんじゃないかと思います。先方によりますけど。

委員長（西村慎次郎君） 先方の都合もあるんで、この場では6月のどこかでというところで決定させていただいて、正副委員長のほうに一任いただき、日程調整はさせていただくということでよろしいでしょうか。

〈異議なし〉

委員長（西村慎次郎君） 日程調整はしていくんですけども、学校側に対してどんなこと
をお伺いしたいかということの取りまとめをそれまでにして、約1カ月くらい前には先方へ
お伝えして準備していただくものはしていただくという形かなと思ってるので、もう一度5
月ぐらいにそういった学校への質問事項というところで、そこを取りまとめたいというふう
に思っていますが、よろしいでしょうか。

〈異議なし〉

委員長（西村慎次郎君） それでは、次回の委員会につきましては、5月中旬もしくは上
旬に開催させていただいて、それまでに皆さんのほうで学校訪問する際の質疑事項というこ
とで整理して出席していただくということでよろしいでしょうか。

副委員長（宮地俊則君） 仮日程でも決めません。

委員長（西村慎次郎君） 日程いきますか。5月の上、中旬で。

副委員長（宮地俊則君） 変更になってもいいけど、一応決めとったほうが。

委員長（西村慎次郎君） 次回の委員会ですが、5月14日の有功表彰の後行うというこ
とで、内容につきましては各学校訪問に対しましての質問事項ということで、それについて
協議いただくということだと思います。

〈異議なし〉

委員長（西村慎次郎君） 以上で所管事務調査については終わります。

〈その他〉

〈行政視察について〉

〈行政視察の日程及び視察内容について協議〉

委員長（西村慎次郎君） 次回の委員会の開催日は、先ほど決定いたしました5月14日
です。

こちらからは、以上でございますが、委員皆さんから何かございましたらお願いします。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君） それでは、閉会に当たり、議長、何かございましたらお願いします。

〈議長あいさつ〉

委員長（西村慎次郎君） 以上で総務文教委員会を閉会いたします。